



artful_settaya_002_wood-cuttings

(木彫編)

昨年2023年10月のアートフル・サフランの摂田屋版です。
いつか、この座学と現地ガイドツアーをセットでご案内したいと
思っています。

木彫編は、こんな順番で、お話しします。

- ① 上前島・観音堂の木喰上人(行道)
- ② サフラン酒大看板 「力士像」
- ③ サフラン酒離れの欄間 「竹に雀」
- ④ 番外編 龍
 - サフラン酒主屋仏間欄間の龍
 - 村松円融寺本堂欄間の龍

『鑑賞は一言でいえば「絵解き」である。
彫りは成形の手立てで副次的なもの。
優れた彫技のみに気を取られずに、
「絵解き」に参加してナンボという世界。』

絵画にも当てはまることがあるでしょうが、特に、躰で木に彫る彫刻という行為には、何故作るのか、という問い合わせが必須のように思います。

だからこそ、「絵解き」に意味があると思うのです。

木の中に棲む「命」を呼び起こすような気持ち、神木にも通じる心のように感じます。

木の中に棲む「命」

- ① 上前島・観音堂の木喰の「観音像」、
 - ② サフラン酒大看板 「力士像」では、
素材の大木の「力」。
-
- ③ サフラン酒離れの欄間 「竹に雀」では、
黒柿の杢のもつ不思議な「力」。

1. 木喰の想い

木喰行道(1718–1810)
佐渡で悟りを得た上人の尊崇

木喰は、一般名称で、応仁の乱以後、荒廃寺院の再興のための勧進の僧のなかで、木喰行をもっぱらにした僧。

数百人とも、数千人ともいわれている中のひとりが、観音を崇拝し観音の木彫りを行にした、木喰行道上人で、特定の寺院や宗派に属さず、全国を遍歴して修行した。

木喰戒を受けたものは弥勒信者であったと云われる。
現世において罪を犯し来世の弥勒の世界に希望をつなぎ、
煩惱の現世を捨てた。

木喰行道の、知られている最古の作仏は子安地蔵。
子を失った経験を持つ父であったのではないか。
小さな仏像を彫るうち、己の作仏彫刻の才能に目覚めたの
かも知れない。

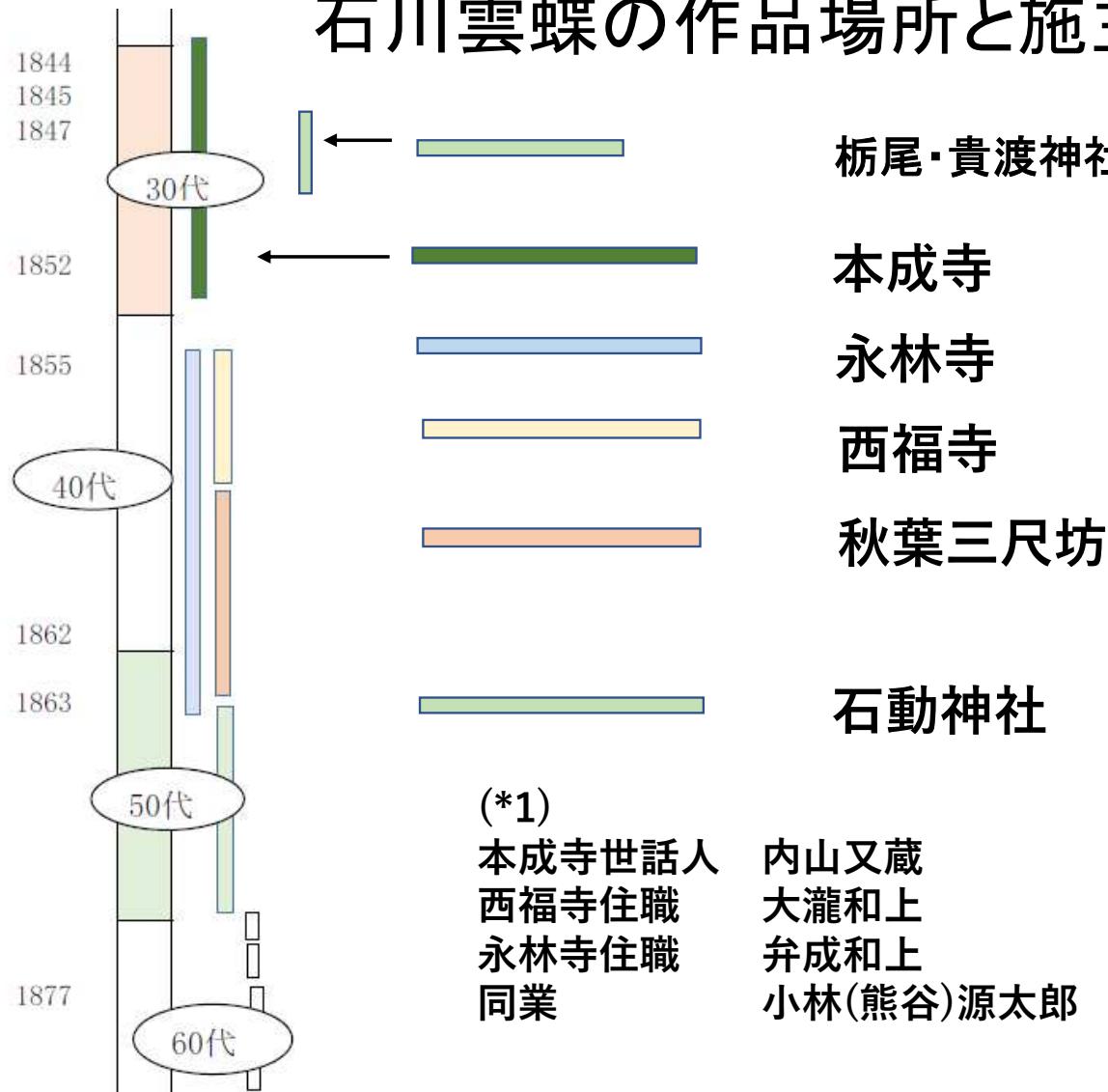
“木喰行道上人の彫刻とその生涯”, 知見寺園江(跡見学園女子大学)

祈りという観点で、後の三条・魚沼の石川雲蝶、
摂田屋サフラン酒の川上伊吉と似たものを
感じていますので、取り上げました。

全国に約600体残る木像のうち262体が新潟県に現存し、
二番目に多い静岡県の55体を大きく超えている。
とりわけ長岡周辺の、小栗山木噴観音堂の33体の観音像、
白鳥町・宝生寺の33体の観音像、上前島・金毘経堂の34体の
観音像、この三つの堂をあわせて百観音は、西国・坂東・秩父
の観音靈場の再現を意図したとしか思えません。

木喰	弾誓上人への尊崇の念	観音靈場を再現
雲蝶	大瀧和上の想い	打ちひしがれている 民衆への慈悲
伊吉	仁太郎の想い	薬師如来への祈りの 世界を再現

石川雲蝶の作品場所と施主



中心人物(*1)との対面
いつ、どのように

依頼の受け方
本人の気持ち

仕事の進め方

それぞれに
ストーリー

なぜ越後に木喰行道上人の作品が多いかという理由

越後を二度、訪れた。

一度目の目的

尊敬する弾誓上人が仏を見たという佐渡に、行きたい。

二度目の目的

もう一度行きたかったが、地震で行けなくなつた。

そこで、せめて越後で修業、ということも、あつたのでは。

養老2年(718) 三十三力所觀音靈場の巡拝はじまる

寛和2年(986年)頃 花山法皇が西国三十三所を巡拝
西国觀音巡礼がさかんになるにつれ、
各地に三十三觀音靈場を設ける氣運が高まった

康元元年(1256) 越後三十三觀音靈場

60代に3年ほど、佐渡の彈誓上人悟りの地で修業、
さらに80代になり、再度、佐渡を目指した。

ひとつの観点として

木喰さんも、良寛さんも、
当時の宗派活動への反論があった。

その思いを表に出さず、日々の
修行と生活の中で、実践した。

正統的修行の後に、
ひとり、修行のために
諸国を歩き回って伝道。

民衆に寄り添うことも、
忘れなかつた。



木喰1805年 新潟県大潟 円蔵寺
毘沙門天、三十三観音上前島・金毘経
堂の三十四観音

- ・三十三觀音

救う相手に応じて姿を変える、觀音の三十三身を象徴

- ・一か所に集約という動きも発生

例:上前島・金毘羅堂の三十四觀音

栂尾美術館前の三十三觀音

- ・一か寺にお参りも、同等のご利益と進化

- ・満願出来た感謝のしるしに御礼参りをする靈場として、
比叡山延暦寺・根本中堂や善光寺など

木喰1804年

上前島・金毘羅堂の三十四觀音



その木喰上人の造仏を支えた、青柳興清ほか上前島の人々。作業場を提供したり、小栗山、白鳥を含め、木材を調達・運搬したりと、木喰上人の三年に及ぶ上前島逗留生活を支えた。

青柳興清は上人晩年の四年、上人の京での造仏も同行支援。一部の作には、「加勢 大工興清六十才」などと墨書き。

四年後に上前島に戻るまで、上人の身の回りの世話に留まらず、木仏の材料の段取りなどをこなし、「共同制作者」の域に達していたものと思われる。

(『前川のあゆみ』 長岡市前川・同編集委員会2015より)

～ 木喰さんの60を超える晩年期の作品は、口元に微笑みを浮かべ優しい表情の「微笑仏」とも言われ、拝観すると自然と心が和み温かな雰囲気に包まれます。越後逗留の時期は、まさに「微笑仏」です。そのような土地が摂田屋の近くにあり、そのような人がいた。美術史・宗教史的にも重要と思われます。

～それぞれの施主の、それぞれの祈願

+

それらに応じながら、作者自身の心に秘めた共通の意義

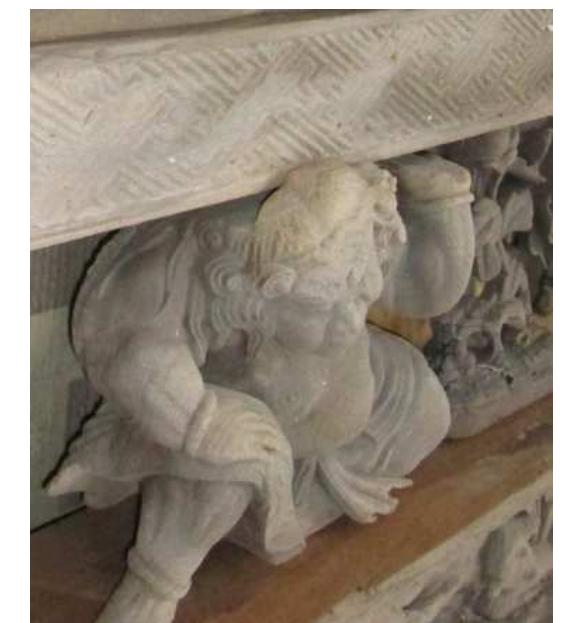
② サフラン大看板の力士像

薬師如来像台座の
異形像（力士像）

異形像は台座腰部の四面に、計十四体が浮き彫りされており、うち南北二面の中央、二つの愈(がん)形の間にはそれぞれ一体、脆坐する異形像をあらわしている。



サフラン大看板の
力士像



サフラン大看板の力士像

薬師如来像台座の異形像（力士像）には、インド由来、インドネシア由来など、諸説があるが、いまでは、「仏法の守護者」という説が有力らしい。



大橋一章 松原智美 編著、「薬師寺 一美術史研究のあゆみ」里文出版(2000)の
中に、第二章付 金堂薬師如来像台座 「薬師如来像台座の異形像」
筆者は、下野玲子氏（早稲田大学會津八一記念博物館主任研究員）

サフラン大看板は、名工 金子九郎次の作

柏崎宮大工集団の、有力メンバ

柏崎の宮大工集団とは、
北前船の運行により、全国から仕事を請け、
代表的なものに、函館の高龍寺がある。

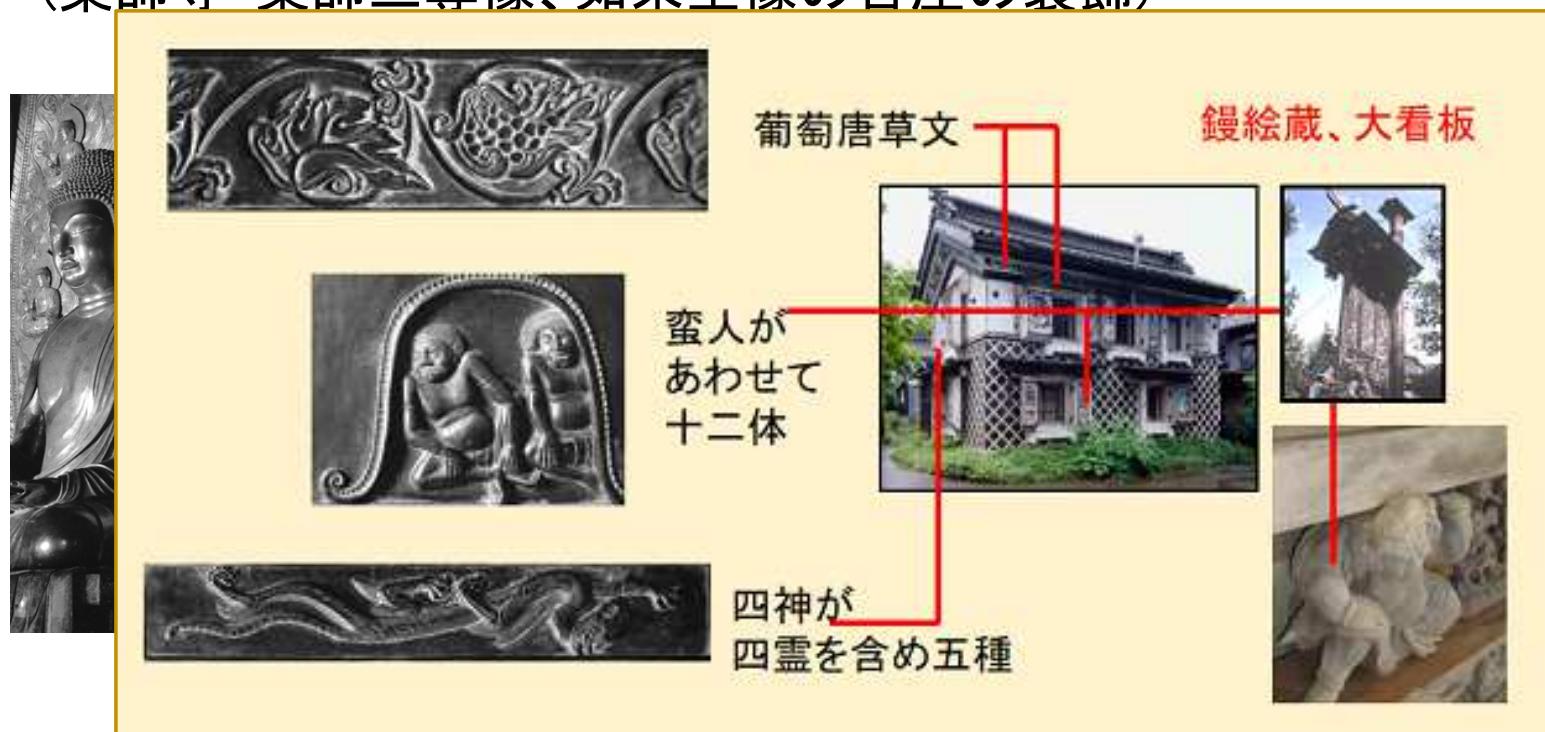
サフラン酒の随所に、「双龍」と「宝珠」（薬師如来）



ちょっと飛躍しますが…

薬師如来台座の装飾

(薬師寺・薬師三尊像、如来坐像の台座の装飾)



錦絵蔵の装飾として、仁太郎さんが、薬師如来を莊厳する台座を意識したとしか、思えませんが、どうでしょうか。

葡萄唐草文

衣装蔵の鉢巻に大きな葡萄唐草文

この文様は、アッシャリアに起源し、ギリシア・ローマ・パレスチナから中国・日本等へ伝播したとされる。

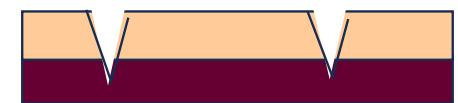
中国由来というより、ペルシャ、西アジア由来であり、命の連鎖を表すもの。

③ 離れ座敷 玄関前の「竹に雀」の黒柿 欄間



美しい黒柿の大きな希少木材、渋の天然の配置を見事に生かしたデザインの力、堅い柿の木を一木・透かし彫りにした指物師の技、この三つの奇跡の集約。

「竹に雀」の拡大 ～頭部、羽の絶妙な渋の生かし方



よく考えますと、「見事」と言うしかない、奇跡の彫刻です。

- (1)この40*20cmの一枚板の柿の木は大変な大木、しかも黒柿という貴重なもの。
- (2)彫り込む前は、この1、2cmセンチ手前の平面にある縞文様を手掛かりに、少しづつ彫って、その奥の黒や茶の色の位置を想像しながらデザインを決めていったはず。黒柿の出方を知り尽くした人なのでしょう。
- (3)堅い柿の木を、一木の透かし彫り欄間に仕立てた、指物師の腕も凄い。

迎賓館の玄関を飾るにふさわしい逸品と思います。

このような、奇跡ともいえる欄間の製作を
指揮した指物師は不明ですが、
ただものではない。

黒柿の美

樹齢数百年を越える柿の古木のうち、ごく稀に黒色の紋様があらわれることがあります。この紋様があらわれた柿を「黒柿」と呼びます。

150年以上の古木にのみ現れ、10000本に一本という出現率とのことで、希少で、高価な材木です。

黒柿の成因

根の白色部分で、球菌などの微生物がCa,P,S,Clなどを取り込み、生体アパタイト(鱗灰石)を形成し、成長するに従い、更に黒色化。

そして年月を経るにしたがって、幹の辺材部に黒色の縞模様(孔雀柾)を作りながら珪化木(植物の化石)を形成することが証明されました。

④ 番外編 欄間の龍

サフラン酒の錦絵蔵二階の展示室に
主屋仏間の欄間があります。

。





近隣の村松町の医王山圓融寺への参詣が、恐らく「昇り龍と降り龍」の原点



729年行基により開創、当初天台宗で976年頃、円融天皇の勅願所となった。後に真言宗。高野山宝龜院末寺を経て、現在智山派 総本山京都智積院末寺。本尊は薬師如来。内陣と外陣の間の欄間に「昇り龍と降り龍」（江戸末期の作）



村松・医王山円融寺の本堂欄間
龍の彫刻（江戸末期の作）

龍は、怖いもの、恐れの対象から、
守護神へと変化



奈良県、高松塚古墳の東壁面中央「青龍図部分」写真／毎日新聞社〈アフロ〉